

重度・重複障害児における応答行動の形成に関する事例的研究

○高橋ひかり (日本福祉教育専門学校) 小林亜由美 (茨城大学大学院教育学研究科) 勝二博亮 (茨城大学教育学部) 田原 敬 (茨城大学教育学部)

KEY WORDS: 重症児 応答的環境 意図性

(目的)

吉田ら(2015)や勝二ら(2016)が約3年にわたって、ある重度・重複障害児(M児)を対象として能動的動作促進の取り組みを行ってきた。その結果、M児の表出は以前に比べて豊かになり、働きかけに対して応答していると思われる行動が確認された。しかし、これまでのスイッチ操作場面では、かかわり手の問いかけによる反応というより、スイッチ操作に付随して生じるフィードバック刺激を一人で楽しんでいる活動とも考えられた。

そこで、本研究ではかかわり手が先行刺激音を呈示する間にスイッチを操作する環境を設定し、かかわり手からの働きかけに対して応答する活動を通して、M児とかかわり手の相互交渉へと発展させるための支援を実施した。

(方法)

1. 対象児 (M児)

生後3ヶ月時に大脳白質欠損と診断された8歳8ヶ月の女児であった。自力での立位や座位姿勢保持が困難で、移動時などは座位保持付車椅子を使用していた。日常的に頭頸部の回旋動作がみられた。視機能は光覚程度で、聴覚機能は病院のABR検査で正常であり、行動面からも音源方向への頭部・眼球運動が見られたことから、聴覚情報を受容していることが窺えた。発声はあるが発語はなく、Yes/Noや要求などの意思表出行動は確立されていなかった。

2. 活動期間

201X年3月18日から同年11月11日まで原則週1回の頻度でM児の自宅居間にて支援を実施した。1回の訪問を1セッション(S)とし、1セッションは30~40分程度で、全24回の支援を行った。なお、S1~10までは勝二ら(2016)が実施してきたスイッチ押し活動を継続しつつ、活動内容変更に伴う準備期間とし、S11より本研究の支援を開始した。

3. 活動内容

スイッチ押し活動では、先行刺激音(断続的なホワイトノイズを用いた。以下、先行音とする)呈示中にタイミングを合わせてスイッチを操作する環境を設定し、かかわり手からの働きかけに対する応答過程を検討した。AbleNet社製のジェリービーンスイッチツイスト(以下、スイッチ)をM児が着席する座位保持付椅子のヘッドレストの右側に設置し、先行音の呈示中にスイッチ操作をすると、4分割された音楽『おもちゃのチャチャチャ』の1フレーズが再生されるよう設定した。かかわり手はM児の正面からかかわり、「Mちゃんいくよー。『おもちゃのチャチャチャ』聞こえるかな。」という言葉かけの後、20秒間の先行音をM児の顔正面で1、2秒間呈示し、約5秒間かけて音源を右方向に動かし、スイッチを押下するよう誘導した(図1)。

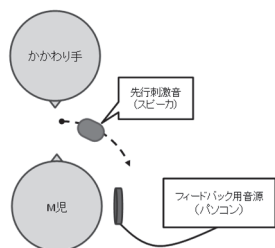


図1 スイッチ押し活動の様子

4. 分析

映像記録からM児の行動表出やかかわり手とのやりとりなどを経時的に筆記記録した。なお、他と先行音が異なるS13は分析対象から除外した。

(結果および考察)

1. 初回セッションにおけるスイッチ操作の獲得過程

初回のS11ではセッション中にスイッチ押下動作を獲得していく様子が認められた。そこで、S11における行動パターンの変容過程について以下に述べていく。

①環境変化への気付き(第1試行~第3試行):はじめは先行音に対して驚愕反応を示していたが、次第に音の方向に頭部を回旋させてスイッチ押下が成功し、音楽が流れることを確認すると、笑顔がみられるようになった。②学習過程(第4試行~第13試行):その後、音源方向への頭部回旋運動が明確にみられるようになったが、先行音呈示中に押下できない場面も認められた。そのような場面では音楽が呈示されないため、不快と思えるような発声や何度もスイッチ押下を繰り返すなど、音楽が聞こえないことに対する不満を態度で示していた。③関係性の理解(第14試行~第19試行):セッションの終わりではスイッチ押下に成功することが多くなり、フィードバック音楽に対する笑顔や開口がみられた。このようにM児がセッションの中で先行音とスイッチとの関係性を学習している様子がうかがえた。

2. 全セッションを通してみた応答的行動の形成過程

頭部回旋動作に先立ち、スイッチ方向への眼球運動がみられるなど先行音に対する明確な応答と考えられる動作パターンを随意的応答とみなし、総試行のうち随意的応答がみられた試行の割合を成功率として算出した(図2)。その結果、S17以降で成功率が上昇し続け、それが安定していることがわかった。先行音とスイッチ操作の関係性を学習したと思われるS11以降も、セッションによってはスイッチ押下が上手くできない試行はあるものの、先行音に対する笑顔が認められたり、先行音が鳴ったことを確認してからスイッチ押下動作を開始したりするなど、先行音に気付いて意図的にスイッチを操作する様子が徐々に見られるようになった。これらのことから活動を継続する中で、M児は試行錯誤しながらも先行音とスイッチ操作の因果関係のある程度理解していったものと推察された。その背景には、かかわり手が表出行動に丁寧な意味づけを行い、M児の意思表出における意欲を高めたことが、明確な意思表出の促進につながったものと考えられた。

(TAKAHASHI Hikari, KOBAYASHI Ayumi, SHOJI Hiroaki, TABARU Kei)

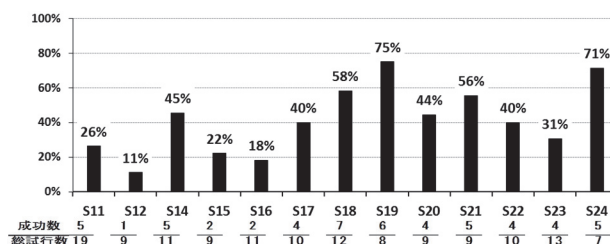


図2 各セッションにおけるスイッチ押下の成功率